高校作文教育の研究

――実践報告を中心に――

首藤安男

はじめに

一　年間作文指導表

二　実践経過

A　年度初めの国語基本調査（一年）

B　最初の授業に対する調査（一、二年）

C　短歌作製と合同批評（一、二年）

D　俳句作製と合同批評（一、二年）

E　詩作と詩を散文に（一、二年）

F　短歌鑑賞文とその扱い（二年）

G　要約・大意（字数制限）・本文抜き書き整理と問題考察・古文の部分訳（一、二年）

H　日記・手紙文の指導（一、二年）

I　学習後、教材と同種の文を作る（一、二年）

J　シナリオ作製（春風馬提曲・夕鶴）（二年）

K　研究発表プリント・ノート整理（二年）

L　学期末ごとに反省記録（一、二年）

M　休暇の課題（一、二年）

N　三年生就職作文の指導

O　行事と作文

P　クラス経営と作文

Q　その他

三　作文指導の障害となるもの

A　生徒について

先入観の除去

知らない

書けない、書かない、など

B　教師について

生徒と親和

時間がない、読めない、評価と処理の問題など

四　評価（処理）

A　教師

B　生徒と教師

C　生徒

D　その他

五　反省

むすび

はじめに

過去二年間、三十三年度と三十四年度において、どの折に、どこで、だれに、どのようにして書かせ、どのように扱ってきたかということなどを発表して、ご批判をいただきたいと思っています。文例はすべて、大分商業高校において書かせたもので、私の授業の関係から、主に二、三年のものになっています。

一年間作文指導表

学期	月	大単元名	小単元名	作文指導
①年 1	4	（3単位）自然に親しむ	千曲川旅情の歌 春十句 三里塚牧場 浄瑠璃寺の春	詩を散文に。（調査） 俳句・短歌 合同批評 生活作文　○○の春
	5	ことばと生活	ことばの力 談話の味 小説の読み方	↓
	6	小説の鑑賞	「坊っちゃん」管見 安井夫人 伊豆の踊り子	要約・大意、抜き書き整理。 （反省記録） 夏休みの反省、夏の思い出、美しい生活 読書感想文、三十一音日記
	7	国語基礎知識 夏休みの課題	漢字練習	
2	9	古典の世界	文語文法の練習 天の羽衣 赦文	↓
	10		忠度の都落ち 舞へ舞へかたつむり	部分訳、抜き書き整理

3	11	手紙と日記	夢応の鯉魚 牛になれ 手紙について 廣中日記 日記雑話 秋の絵すがた 犬 水	手紙文指導　書式 手紙を書く。 日記を書く。
	12	人生を見つめて	わたしの勉学時代 百人一首暗記	（反省記録） 除夜の鐘を聞いて（ラジオ放送を聞いて感想文を書く。）
	1	正しい理解 冬休みの課題 〃 旅と文学	課題評価 長崎へ 旅論 都鳥 隅田川	表記法の訂正、（本文の主題、句読点）推敲。 短歌 抜き書き整理 部分訳、抜き書き整理 〃　〃 〃
	2	能と狂言	うりぬすびと 語学珍談 日本語の特色	
	3	国語と外国語		（反省記録）
② 1年	4	（4単位） 文学と人生	甍のうへ 文学の世界 城の崎にて 国語の基礎知識 雲と木 虫のいろいろ ただ今の一念 国語の基礎知識	要約 抜き書き整理・（指示語の内容など） 「虫の思い出」を書く。（生活文） 思想要約
	5	○ 随筆・評論	○	

2	6	近世文学
		近世の文学
		おくの細道
		国語の基礎知識
		世界の借屋大将
		国語の基礎知識
		夏休みの課題（文法）
	7	冥途の飛脚
		春風馬堤曲
	9	近代俳句抄
		国語の基礎知識
		「秋の祈り」鑑賞
	10	近代詩抄
		国語の基礎知識
		近代俳句鑑賞
		近代俳句抄
		近代短歌鑑賞
	11	近代短歌抄
		国語の基礎知識
		夜明け前
		形
	12	長編と短編
		国語の基礎知識
		演劇について
		夕鶴
		国語の基礎知識
		中世の文学
		天の香具山
		日野の閑居
3	1	演劇と映画
	2	中世文学

2	6	まとめ。要点の箇条書き。
		発表用プリント作製
		（反省録）
		三十一音（字）日記
	7	シナリオ作製—放送台本（岩田九郎氏）を示す。—
	9	詩作
		俳句 } 合同批評
		短歌 } （短歌抄の一つを選び鑑賞文）
	10	まとめ　抜き書き整理。
		まとめ　〃
		まとめ　箇条書き。
		（反省記録）
	11	冬休み課題。○　除夜の鐘を聞いて　○　古典感想文
		シナリオ　夕鶴前編
	12	要点整理
		ノート整理（発表、質問形式授業の徹底のため）
		部分訳

	3	国語の基礎知識 鼻の長き僧の事 国語の変遷 文体の変遷 国語の基礎知識	
③年	国語の変遷 （1単位） 就職生の国語	作文指導	（反省記録） 書式（原稿用紙の使い方など） 文題に対する対策 作文をさせる（自己を練る。私の家庭）

二　実践経過

A　年度初めの国語基本調査（一年）

これから国語の授業を進めていくのに、各個人について知っておいた方がよいとか、またぜひ知っておきたいことについて質問形式で答えさせます。

例　○文語文法を学習したか。
　　一週、何時間。学習年と期間は。
　　○作文を書いたことがあるか。
　　中学時に何度ぐらい。どういうものを。

B　最初の授業に対する調査（一、二年）

これは授業の後で、西洋紙四半分のものに簡単に書かせています。

声、話し方、問い方、
今後の授業への希望など。
これに対しては、
いつもよく書き、かたすぎる。
おもしろくやってくれ。
少しユーモアがなさすぎる。
生徒にあてない方がよい。
といろいろありました。
これは私の授業にすぐに役立っています。一年目の最初はがっかりしましたが、次の年はかなりの変化がみられました。これはLの項で詳しく述べることにします。

C　短歌合同批評

一年は「三里塚牧場」「長崎へ」の学習後に、それぞれ書かせまして、全員プリントにし、時間は少し後になりますが、合同批評（生

徒と先生）を行ないます。

二年は「近代短歌鑑賞」「近代短歌抄」の学習後、折を見て書かせ、これも一年同様プリントにして、全員に配り、合同批評を行ないます。

私が教卓で一首ずつ読んでいき、制作動機や、この歌のよさを作者に発表してもらいます。五首も六首も作ったときには、そのうち一番よいものを選んで、発表するようにしました。二首以上の提出になっていましたが、二首というものはごく少数で、ほとんど多く作っていました。

遠足とか、入学時、夏休み前後は感ずるところも多いようです。自然に接する機会、感動を示していい場の自信をつけることも大切のようです。

一年と二年では、二年の方がずっと上手でした。一年の方は短歌か何か、どちらでよいとしても、解釈や鑑賞の対象にならないものも多いようです。

二年は一年生にはないふざけた歌があります。例を出しておきますと

おしいかな　バスの車掌の　足見れば
ダイコン足に　一寸毛かな

などです。これは三十三年度（第一年目）の三学期、お別れ遠足の時、臼杵の石仏に貸し切りバス五台を連ねて行きました時のものです。この時には、感動するに価するものに接しましたので、今までのものより、よほどよいものが提出されました。普通の例を出しておきます。

のどかなる田舎の道をバス行けば
小牛あわてて端によりけり　　宮本　繁美

何日の日かきざみこまれし御仏の
前にしばし我はたたずむ　　一万田元美

石仏は生徒らには、だめかと思いましたが、「五号はわれらを待ちて遠かなり行きて語らむ石の仏を」という感慨もあったようで、急ぎ、しかも話し語りつつ山をおりておりました。

また、短歌は文語法の勉強にもなります。次の例は、生徒と笑って学習ができました。

めずらしや国語の教師遅れたり
あすは雨になりにけるかも　　二ノ六　K・O

君は測候所の所長になったら、成功するでしょうともいいました。

D　俳句合同批評

これも一・二年とも教材学習後、課題として作らせましたが、なかなかそろいませんで、九月になって一度に提出させました。ちょうど、二年生が「近代俳句抄」を学習後に、一・二年とも俳句合同批評の時間を一クラス一時間ずつとりました。

どうしたことか、俳句の方は一・二年いずれも物にならないのが大半を占めて、残ったものは同程度のできのようでした。

二、三の例を出しておきます。

星の降る場末の町の夜寒かな　　一ノ五　伊延　正孝

音頭とる手を休めけり盆踊り
書を読めば窓にばらばら落葉かな　　一ノ六　亀井　征雄

秋風に耳ふかれおり牧の馬　一ノ六　佐藤　俊一
熱砂の子の両腕に七島イ　二ノ六　秋吉　武範
久々に日だまりに来てたわむれる　二ノ六　西江ひさ子

俳句の合同批評はプリントを全員にわたし、情景のよく表現されているもの、真実性のあふれているもの、読んで気持のいいものなど感じたものに○印をつけさせ、それらを統計的に調べて、よい句について鑑賞を試みました。生徒も自分達の俳句の鑑賞は楽しいようでした。

E　詩作と詩を散文に

詩の鑑賞学習の後、詩を作らせました。また、文語定型詩を口語自由詩にさせてみました。資料をどこかにやってしまって、ここになくて残念でたまりません。「千曲川旅情の歌」（一年）「ああ大和にしあらましかば」などです。今年は「春風馬堤の曲」を口語訳にやってみようかと思います。

F　短歌鑑賞文とその扱い

二年生の教材「近代短歌抄」十二首の歌をプリントにして、その中の一つを選んで鑑賞文を書いてみようということで書かせました。女子のクラスでは与謝野晶子の歌「清水へ祇園をよぎる桜月夜こよひ逢ふ人みなうつくしき」が多く、約半数を占めていたようです。書いた文を読ませ、その感じ方、鑑賞のし方について、他の同歌選択者に意見を述べさせ、その他の者の質問を聞き、とくに注意すべき所のみ、私が注釈を入れて授業を進めました。これらについては、字数、センテンス数、また、一つの歌の見方の相違、男女の違いなどを分析してみたいと思っています。

文例

清水も祇園も京都の桜の名所で、桜のたくさんあるところである。そこの花ざかり、清水から祇園へと歩いて行く人もおおぜい出ている。月もおぼろにかすんで、夢幻的な感じもする。心もうきうきして、知らない人に出あっても、だれもが美しく感じられる。それとともに、いま行く人である作者も美しく感じられるようだ。　二ノ一　幸　芙美子

鑑賞がさきにできて解釈がおろそかにされている点を補い、文法的な説明を加えて、次々と進行させて行きました。これにも興味をもち、指名されても名人が書いたものを確実に話すことができてうれしいようでした。しかし、書かせる前は、また書くのかという気持の生徒がほとんど全部のようでした。

G　要約・大意（字数制限）本文抜き書き整理と問題考察・古文の部分訳

これは教材を学習していく途中において、また学習直後、学習の一環として、要約・大意を字数制限でノートに書かせ、発表させ、よりよい要約に抜き書きで指導したのです。

教材の設問を考察するのに本文の抜き書き整理は、生徒に確かに把握させることができたようです。

しかし、時間を必要としますから、多くは課題にして、結果だけで授業を行ないます。古文の部分訳は、教室でちょっと書かせるこ

とができます。机間を巡視しながら、誤字などみつけて注意を促したり、句読点の落ちを注意してやります。

生徒は自然と書くことに慣れてしまうようです。書いたものを十分に利用してやることが、彼らに次も書くエネルギーを与えるようです。

H　日記・手紙文の指導

教材「牛になれ」「手紙について」の学習とともに、手紙の書式、こころえをプリントして渡します。便箋を持参させ、実際に書かせてみます。表記法の注意、相手を考えて書くこと、自分の真の心が伝わるようにと心がけさせています。

日記は、樋口一葉の「塵中日記」を学習します。普通の日記は書けといっても書きません。それで、楽しく書かせよう、しかも簡潔な表現に心がけさせようということで、三十一音日記というのを課題として出します。

生徒は、日々の記録が集まって続いて行くと、個性あふれたそれぞれの立派な作品になることを知ったようです。交換して読ませ、いいと思った表現や、その人らしいおもしろい把握を拾わせてみました。だが、深くはしませんで、この評価は、読んで独特だと思ったものを文集発行と同時に、それに発表することにしました。私も労をはぶくことができましたし、生徒も文集が待ち遠しく、両方よかったと思います。

文例

七月二十一日（時）　二ノ六　砂山　照夫

野球応援す。単車パンク、家に帰るのに苦労した。

七月二十六日

補習さぼった。家でしんけんに遊んだ。いい気持だ。

七月二十三日（木、晴）　二ノ六　佐々木信江

兄帰る、大原女の京みやげ、とても素朴で美し。

七月二十八日（火、晴）

大掃除、朝からほこりにまみれて大活躍。

七月三十一日（金、晴）

汗ながし、我がデザインし服を縫う。とても楽し。

（注）　日数の欠けているのは私の方で略したもの。

三十一音ということを厳重には言いませんでした。それで、なかなか三十一音にできなかったようです。今となれば、かえって、前後三音ぐらいの余裕をもたせるにとどめた方がよかったと考えています。

I　学習後、教材と同種の文を作る

これは生活作文というのでしょう。一年は「浄瑠璃寺の春」、二年は「虫のいろいろ」の学習後に書かせます。

一年生は、入学後の感想ということで「入学の春」とか「大商の春」とかいう題で書かせていますが、ほんとうにうれしく胸躍めたことが、上手に表現されているのは少ないようで、一クラス一つ二つくらいをとりあげ、扱って書く方向を指導しております。

やはり、二年生になると上手になります。

伸びのない者も多いですが、読んでみますと、一年とは違ってす

っきりした感じがします。そして、学習した教材の「域の崎にて」「虫のいろいろ」の影響がかなり出ているのがあります。

文例（二年）

虫の思い出　　増富　一

虫にはいろいろある。私はたいていの虫は知っているつもりである。また、それ以上に知ろうともしない私である。

私には、今だにあの日のことが忘れられない。

私の家族は至って虫はきらいである。特にやもりがきらいである。私の家は、まるでやもりの巣のようでもある。―（中略）―やもりは、やっとの思いで、私のかぶせた土の中からはい出し、まさに逃げようとしていたところだ。私は、いきなりやかんを傾けた。もうもうと湯気の立つ中で、やもりはみるみるうちに、四つの足をつっぱらせ、一度頭を上げた。私はその時ゾウーッと背筋が寒くなった。やもりは煮え湯の中で、くるりと白い腹を見せてひっくりかえり、四肢としっぽとを上にあげて眼を閉じていた。その後で、祖母に湯を全部ひっくり返した、といって叱られた。私は後で、スコップを持ってその罪のない死骸を土饅頭の下に埋めてしまった。

あの日以来、私は便所に入るたび、やもりを見るが、もう前のようにはこわくない――（後略）――

この文には「域の崎にて」の影響があるのではないかと思いました。

これらの作品は、一ヵ月ほどで、丁寧に読んで、文中、文後に評を書き、一冊のとじ本にして、クラスルームにおき、生徒にも読後評をつけるようにいいました。二人ほどが書いておりました。詳しく読んだことに対して、喜んでおりました。たびたびはこんなに詳しく見る時間はありません。

J　シナリオ作製

二年で、教材「春風馬堤曲」「夕鶴」の脚本を書かせてみました。

「春風馬堤曲」の方は、岩田九郎氏の「春風馬堤曲放送台本」というのを読んで聞かせ、参考にして書かせましたが、才能がないものには、なかなかむずかしい課題だったようです。

もちろん蕪村の原作「春風馬堤曲」を学習した後でしたが、提出は冬休みがあけた時であったと思います。

「夕鶴」は、木下順二　の脚本「夕鶴」学習後、「夕鶴」の前編とでもいうものを書いてみようと言って書かせましたが、案外よく書いております。

文例　　二ノ二　合沢　良子

（前略）

第二幕　茶店の中

（旅人が四、五人茶を飲んでは雑談にふけっている。その間を六十がらみのおばあさんが忙しそうに、お盆を片手に、行ったり来たりしている。）

――そこへ娘が遠慮深げに――

娘　「こんにちは」

（と入って行く。雑談していた旅人達一せいに振り向く。）

老婆「おやまあ。これはめずらしい。ずいぶん久しぶりですね。
すっかり大きくなって。」
（老婆はさも自分の子がやぶ入りでもしたかのごとくいそいそとしている。娘はほほえんでいる。）
――（中略）――
解説「抱きあった母娘を夕やみがすっかりくるんでしまった。ふとあげた娘の瞳のかなたに赤や紫色の夕焼け雲がにじんで解けてゆきました。」
音楽――子供の歌声――
夕焼け小焼けで日が暮れて
山のお寺の鐘が鳴る
解説「藪入りや、寝るは一人の親のそば」
音楽――子供の歌声つづく――
お手々つないで皆帰ろう
カラスと一しょに帰りましょう
――しだいに小さく。――

K　研究発表プリント、ノート整理

「奥の細道」は、いつもグループ研究発表を中心にした授業をしているので、プリントを用意させています。書くにあたっていろいろくふうをしてグループの個性が出て、相互に勉強になっているようです。発表、質問形式の授業は最初はいやがりましたが、私が質問の第一陣に立って指導すると楽しくなっているようです。今では、自分達が調べて発表するのはいやだが、友に質問するのは楽しいので、嫌わなくなりました。
ノート整理はなぜ必要か。
発表形式授業は、俳句や短歌の教材にも、ときどき行ないます。一年は少なく、二年に多く発表の時間をつくっておりますが、いつもプリントを用意するということはできません。それで、発表の授業の終わった時、ノートを提出させます。少しは心してノートしますし、調べて書いたものを見ることもできます。それで、ノートを整理して提出させることが大切です。

L　学期末ごとに反省記録

私の反省のためにと思って書かせ始めたことですが、結果的には生徒に反省させ、書くことに慣れさせることにもなりました。
最初の年（33年度）の記録、二学期を除いて代表的なものの一部を書きうつします。
一学期
第一に先生のことについて
何だか落ち着きがなく、そわそわしてることが欠点の一つでしょう。また、授業のベルが鳴ると走って来るのですから、速くて私達は道具をそろえる暇もないくらいです。だから授業ベルが鳴ってからゆっくりして来てくださるように……。
第二に学科について
もう少しユーモラスに授業を進めていったら、私たちもあきずに、また疲られずに授業が進んでいくのではないでしょうか。私たちがまとめやすいように黒板に書いて下さるようにお願いいた

します。

三学期　　二ノ一　菅　キミエ

この一年間及び三学期を顧みて、私はまず国語がだんだんとおもしろくなったというか、興味が深くなったようである。今まで嫌いであった理由はいろいろあるが、興味をもった原因は、何といっても新しい教育を受けて来た先生の新しい教育による授業のためではないだろうか。その一例は、「奥の細道」を勉強する際にも、グループ研究によって、下手ながらきったプリントで研究発表したことである。また近代俳句及び短歌においても、それぞれ個人研究をやって発表したり、あるいは石仏への遠足において短歌を作って歌集にしたり、これらはみんな、私には、いつまでも高校時代の楽しい思い出として、残ることでしょう。又授業中は一年の時の先生と違って、元気にあふれた授業であった。こういうことが私に興味を持たせたのでしょう。

これからも前記のような新しい教育方法で、沢山の方法を教えていただきたい。一、二学期の終わりにそれぞれ私達に注文やいろいろなことを書かせましたが、これは大変いいことだと思います。ただ、先生にお願いすることは、いつでも、前列の人とこそこそ話しますが、あのような時は大きな声でみんなに言っていただきたい。一年間どうもありがとうございました。これからもよろしくご指導下さい。

一、二、三学期を通じて、私への注文、これからの国語授業に希望することを卒直に書いてくれるように頼みました。名前は記名、無記名自由に選択させました。一学期のとじ本は、「あわれ一学期」と名づけ、二学期は、「いますこし」、三学期は「ひととせのみ」と名前をつけました。そして生徒の注文が正しいものであれば、できるだけ実行に努力しました。生徒もそれを認めてくれていたようです。二年目は変化少なく、やはり最初の年のものを読みかえして、思い出し、初心を忘れないようにしています。

M　休暇の課題

夏期の休暇、冬季休暇がありますが、夏は一、二年共に日記（三十一音）、一年生は、「夏休みの反省」「生活の中の美」「読書感想文」。冬は「除夜の鐘を聞いて」（ラジオ放送を聞いて）を一、二年に課題として出します。二年生は古典作文の読書感想文を書かせます。一年には小倉百人一首の暗記を課題として出しております。

文例

「路傍の石」を読んで　　一ノ二　岡本美津江

中学校に通っていた時、ある雑誌の終わりの頁に「路傍の石」のあら筋が書いてあった。読みたいと思った。でも図書館といっても名ばかりの私達の学校には、この本はあいにくなかった。その時はそのまま過ぎた。

高校になってから、ある日、友達の家へ遊びに行った。なんとはなしに友達の本箱に目をやった。その本箱にこの本があったのだ。それでさっそく借りて読んだ。

（後略）――四百字原稿用紙、八枚――

話し言葉の反省　　一ノ三　岩本　務

（前略）

もっとも田舎の学校では「俺」ということばは、しょっちゅう使われているようだが、でも、これは田舎だけではないですね。町でも、放送劇の中でも使われているようですね。しかし、家にいる時はこんなことばは使ったことがありません。

（原稿用紙二枚略）

N　三年生就職作文の指導

これは今年初めてのことですが、クラスで合同指導ではなく、個人的指導は前からやっておりました。就職生は、その試験に作文と面接ということがよくあります。

普通の作文と違うところは、読む人が会社の人であるので、当用漢字にないむずかしい漢字でも知っていれば使った方がよいということ、芸術ではないので、ただ建設的方向のみが内容として必要なようです。ほんとうに自分の考えが、相手に正しく気持よく理解されるように書かなければなりません。誤字やかなづかいの不統一は相手を不愉快にするでしょうし、句読点のうち方によっては読みづらいでしょう。

それら注意事項はプリントし、学習をさせました。それから、書かせ、また教えて指導します。いろ〳〵の場合がありますので、大変むずかしいようです。

O　行事と作文

旅行、運動会などの前後に、それについての感じ、または感想などを書かせます。

「旅行記」「運動会の反省」などを書かせたことがありますが、思い出にもなり、反省のきっかけにもなりますし、書くことは具体的な資料もありますし、書く自信もつけることができるかと思います。

P　クラス経営と作文

「自叙伝」「わが生いたちの記」など、クラスの生徒の周囲、今までの考え方、性質などよくつかむことができて、実にクラス経営の助けをしてくれます。ただ聞いたのでは、知ることができない内面をのぞくことができる時もあります。

文例

自叙伝　　一ノ五　中川　勝志

昭和十九年二月四日、世界中が戦いに明け暮れている年、私は台湾の首都台北で生まれました。三人の姉の末に生まれ、ただ一人の男の子でしたので、当時日赤勤務の医者であった父は、靴をいつ脱いだか思い出せない程喜びました。私の生まれた時に、川から家鴨が家に上って来ました。そのために、何かすると「家鴨に似たんだ。」と言われます。

（原稿用紙十一枚略）

Q　その他

授業の補欠で、三年生の教室などに行ったとき、「就職試験にあたって」、または、「受験して後悔に言っておきたいこと」など書かせたり、その折々に相応した題で作文させたりします。それは後になって何かに役立つことが生徒にもわかっている方がよいようです。例えば、文集にするとか、他の人々に話す参考にするとかがわかっているばあいの方がよく書きます。

クラブ活動（文芸部）で書かせることもあります。

文芸部員でもない生徒が、だまって、何も言わないのに持って来て「読んでください。」ということもあります。文芸雑誌に出しますとは言いにくいのでしょう。

三　作文指導の障害となるもの

A　生徒について

生徒は楽しい作文というものを知らないものが大部分です。それは書かせるだけで、扱いをおろそかにして、書き損だという気持が積もって嫌いになったものと思います。その先入観を持って書かない前にいやがります。

以上のようなので、とかく書く機会が少ないと、当然書けなくなる。書式も表記も忘れてしまう。書けない、書かないの繰り返しをする結果になります。

また、生徒は長すぎると嫌います。はっきりと構想をたてて書いたことがないので、何かひろびろとして、どうしたものかと思うのでしょう。その結果は、嫌い、ということになります。

また、書く目的・対象がはっきりして、具体的な体験がある場合から書かせるようにした方がよいようです。

次に、書式・表記法を知らないとやはり書けません。

B　教師について

まず、何といっても、生徒から信頼されなくてはいけません。何でも相談にやって来るようであってほしいと思います。書かせたものについては、授業で少しでも扱わねば書かないようになります。書いたものをむだにしないということが大切のようです。

処理の時間、扱う時間がないということも、くふうすれば見つけ出せると思います。それは後に記します。

四　評価（処理）

A　教師

教師が、一人で提出された作品を読み、評価をするばあい、これは忙しいので、年に一度か二度になります。教師が常に処理しなくてはならないと考えれば、つい書かせるのも、おっくうになります。それではいけません。

B　教師と生徒

授業の中で、書かせ、扱うこともできます。文の要点や要約などは、その場でやればよいので、提出させて、一つ一つ読まなくてもよいものでしょう。

C　生徒

生徒に評価に参加させることは、書くことへの興味を持たせますし、手もはぶけます。作品の交換をして、誤字・かなづかいの訂正などをさせるのも一つの方法でしょう。

D　その他

評価は教室のみでする必要はありません。たとえば、文芸雑誌に記載することによっても、生徒は秀れた作品に接し、勉強ができ、一つの評価を終わったことになると思います。

五　反省

A　記録の不備のため、はっきりとした資料をもとにして言えないものになってしまいました。

B　指示したことについても、記録がありません。指示の適、不適によって、生徒が喜んでも書き、嫌うばあいも起るようです。

C　扱い方をまだまだ工夫しなくてはならないと考えています。

D　処理を、もっと、いつでも、どこにでも通用する方法でやりたいと思います。

E　書く力の成長側定をする基準を確立したいと思います。

F　何といっても、目標を確立し、もっと計画的に作文指導を進めて行きたいと思います。

むすび

以上のように実践し、考えてきましたが、今までは、「五　反省」の項ですでに記しましたように、ただ書かせただけでありまして、記録でもできていないありさまです。いささか無計画でした。処理も評価もつきとめて考えてみませんでした。

今までの実践によって、高校生も書けるということがわかりました。しかも、扱いによっては、気持よく進んで書くということがわかりました。

「五、反省」の項に掲げましたことを今後の問題として、この問題を進めていきたいと考えております。

（大分商業高校教諭）